

美妙齋美妙

内田魯庵

青空文庫

一 欧化熱の早産児

丁度この欧化主義の最絶頂に達して、一も西洋、二も西洋と、上下有頂天^{うちようてん}となつて西欧文化を高調した時、この潮流に棹^{さお}さして極端に西洋臭い言文一致の文体を創^{はじ}めたのが忽^{たちま}ち人氣を沸騰して、一躍文壇の大立者^{おおだてもの}となつたのは山田美妙斎^{やまだびみょうさい}であつた。美妙斎はあたかも欧化熱の人工孵卵器^{ふらんき}で孵化された早産児であつた。

これより先き美妙斎は薩摩^{さつま}の美少年の古い物語を歌つた新体詞を単行本として発表した。外山博士一流の「死地に乗入る六百騎」^{とやま}的の書生節^{しよせいぶし}とは違つて優艶富麗の七五調を聯^{なう}べた歌らしい歌であつたが、世間を動かすほどに注意を牽^ひかないでしまつた。が、この詩を発表した時が十八だというから、美妙の早熟の才は推して知るべきである。

美妙斎の名が初めて世間を騒^{さわ}がしたのは『読売新聞』で発表した短篇「武蔵野」^{むさしの}であつた。極めて新しい言文一致と奥浄瑠璃^{おくじょうるり}の古い「おじやる」^{ことば}詞とが巧みに調和した文章の新味が著るしく読書界を驚倒した。「美妙斎とはドンナ人だろう？」と、当時美妙斎の作を読んだものは作者の人物を揣摩^{しま}せずにはおられなかつた。が、新聞で読んで感嘆したのは

マダ一部少数者だけであつたが、越えて数月この「武蔵野」を巻軸として短篇数種を合冊した『夏木立』が金港堂から出版されて美妙齋の文名が一時に忽ち高くなつた。

丁度同時に硯友社の『我楽多文庫』が創刊された。紅葉、漣、思案と妍を競う中にも美妙の「情詩人」が一頭地を抽んで評判となつた。続いて金港堂から美妙齋を主筆とした『都之花』とが発行されて、純文芸雑誌としてのエポックを作つたので、美妙齋の名は忽ち喧伝されて、トントン拍子に一方の旗頭と成済ましてしまつた。

今日の金港堂は強弩の末魯縞を穿つ能わざる感があるが、当時は対抗するものがない大書肆であつた。その編輯に従事しその協議に与かるものは皆錚々たる第一人者であつた。然るにこの大勢力ある金港堂が一大小説雑誌を発行するに方つて如何なる大作家でも招き得られるのに漸と二十歳を越えたばかりの美妙を聘して主筆の椅子を与えたのは美妙の人氣が十分読者を牽くに足るを認めたからであらう。その頃金港堂の編輯を督していたのは先年興津で孤独の羈客として隱者の生涯を終つた中根香亭であつた。が、『都之花』については美妙が一切を主宰して香亭はただ巻尾に謡曲の註釈を載せただけであつた。その時は明治二十一年の春であつた。

『都之花』以前に『芳譚雜誌』とか『人情雜誌』とかいう小説雑誌があつた。が、皆戯

作者さくしやの残党に編輯されていたので、内容も体裁も古めかしくて飽かれていた。『都の花』はあたかも世間が清新の読物に渴する時に生れたので、忽ち当時の雑誌のレコードを破つて、美しい花やかな氣持の好い表紙が新しい氣分を漲みなぎらして若い読書家の心を誘そそつた。随したがつてその主筆たる美妙の位置と人氣とは当時の文学青年の羨望せんぼうの中心であつた。

『我樂多文庫』は『都之花』に先んじて、硯友社の名は新時代の若い文人の集團としてその時既に読書界を騒がしていた。二者を比較すると『都の花』は羽二重はぶたえの黒紋付くろもんつきの如く、『我樂多文庫』は飛白かすりの羽織みじんの如き等差があつた。その代りに前者はドコとなく市氣があつたが、後者は微塵みじんも算盤氣そろばんけがなくて自由な放縱な駄々だだ子氣分こを思ふ存分に發揮してゐた。ドチラにも各々長所があつてそれぞれ人氣を呼んだが、美妙齋はこの二雑誌に跨またがつて、あたかも政党の領袖りょうしゆうであつて内閣の椅子に座しているような觀があつたから聲望隆々として硯友社同人を圧していた。紅葉でさえが當時はなお微々として、美妙に対しては太陽の前の月ほども光らなかつた。

美妙と紅葉とは本もと同じ町に育つて同じ学校に学び、或時あるは同じ家に同宿して同じ文学に志あぎし、相共あいともに提携して硯友社を組織した仲であつた。然るに『我樂多文庫』公刊そ匆うそう々二人が忽ち手を別つてしまつたはいわゆる兩雄なら聯れんび立たずであつて、陽には磊落らいらくら

しく見えて実は極めて狭量な神経家たる紅葉は美妙が同人に拔駈^{ぬけ}けして一足飛びに名を成したのを余り快よく思わなかったらしい。が、『我楽多文庫』の基礎がマダ固まらない中に美妙が『都之花』に趨^{はし}つて別に一旗幟^{きし}を建て、あまつさえ自分一人が幸運に舌^{した}鼓^{つづみ}を打つて一つ鍋^{なべ}を突付いた糟糠^{そうこう}の仲の同人の四苦八苦の経営を余所々^{よそよそ}々しく冷やかに視^みた態度と決して穩^{おだやか}当^なでなかったから、紅葉初め硯友社の同人が美妙を謀^む反^{はん}人^{にん}扱いしたのも万^{まんざら}更無理ではなかった。

が、美妙としてはその時既に『都之花』の外に『以良都女^{いらつめ}』という婦人雑誌を経営し、『女学雑誌』の特別寄書家^{きしよか}として毎号寄稿し、それ以外にもアチラコチラの新聞雑誌社から寄書を依頼されるという日の出の勢いであつたから、紅葉は左^{ひだり}に右^{みぎ}他の硯友社同人と伍^ごするには余りに地位が懸隔し、實際上にも糟糠の友を助けて『我楽多文庫』に寄与するだけの余裕はなかったのだ。紅葉と乖離^{かいり}するのは決して本意ではなかったろうが、美妙の見識は既に眇^{びよう}たる硯友社の一美妙でなくて天下の美妙斎美妙であつたのだ。

二 初対面の印象

私が初めて美妙と音信したのは『夏木立』発行後間もなくであった。私はその中の「武蔵野」を感嘆した一人であつたから、マダ学生 of 貧しいポケットの中から『夏木立』をも購読し、『我楽多文庫』をも『都之花』をも愛読していた。

今から考えると幼稚な鑑賞眼が楽隊入りの異形な文章に眩くらまされたのだろうが、「武蔵野」には非常に驚嘆した。が、続いて発表された他の諸作には余り感服しなかつた。殊ことに『都之花』の巻頭の呼物よびものとなつた「花車はなぐるま」は愚作であると思つた。が、偶然の機会から二、三回音信したのが縁となつて、偶々たまたま金港堂の編輯所近くへ用達しに行つた戻りに天下の人氣作者を見るべく刺を通じたのがタシカ明治二十一年の十一月頃ころであつたと思う。

応接室に通されておよそ十五分ばかりも待つてると、やがて軽い靴くつの音が聞えてスウツと扉ドアを排ひらいて現れたのは白はく皙せき無髻むぜんの美少年であつた。「私が山田美妙斎でござります」と叮嚀ていねいに会釈された時は余り若々しいので呆氣あつけに取られた。美妙が私と同齡の青年であるとは前から聞いていたが、私の蓬頭垢ほうとうこうめん面ひきかに反對ひきかえてノツペリした優男やさおとこだつたから少くも私よりは二、三歳弱としした齡とのように見えた。が、一ト言ひこと二タ言話して見ると極めて世事慣せじなれていて、物ごし態度も沈着おちつきはら払はらつていて二つも三つも年長としうえのように思えた。何

を話したか忘れてしまったが、こんな色の生なまつちろ白しろい若い男があんな巧うまい文章を書くかと呆氣に取られた外には初対面の何の印象も今は残っていない。かえって当の美妙齋よりはその時美妙に紹介された同席の中根香亭の清癯せいくづる鶴つるのような表々たる高人の風ふう丰ほうが今でもなお眼に残っている。香亭は幕人であつた。亡朝の遺臣として声利を謝し聞達を求めず、『天王寺大懺悔てんのうじだいさんけ』一冊を残した外には何の足跡をも残さないで、韜晦とうかいして終ついに天涯の一羈客として興津おきつの逆旅ぎゃくりよに易簣えきさいしたが、容易に匹ひつを求められない一代の高士であつた。二度目に美妙を訪うたのは駿河台すまがたいの自宅であつた。水道橋内のすいどうばし茨坂さいかちざかを駿河台へ登り切つた堤際どてきわの、その頃坊城伯爵が住つていた旗本屋敷はたもとの長屋であつた。売れツ子の若い人気作者の住居すまいとは思われない古風な武者窓むしやまどの付いた頗る見窄みすぼらしい陰気な長屋であつた。(この家は最もう三十年も前に取毀たれてしまった。)精々せいせいが四室よしまかそこらの家であつたが、書齋を兼ねた八畳の座敷の周圍に大小の本箱を積み重ね、ギツシリ塞つまつた和漢洋の書籍が室内を威圧していた。今考えるとそれほどの蔵書ではなかったが、二本立ちの本箱の一つしか持つていなかったその頃の私の眼には非常な大蔵書家であるかのよ

うに映つた。殊に函入はこいりの『源氏物語』や上シャンハイ海版の函入の石印本せきいんなどが馬鹿に光つて無知な書生ツぼの私を驚かした。

その頃の私は文学よりは経済に志ざしていた。が、小説は好きで新刊も旧刊もかなり広く読んでいた。外国小説も語学の研究かたがた少しは見ていた。専門小説家がドレホド広く読んでいたかは知らぬが、読書の量はそれほど負けているとは思わなかった。が、その晩の美妙齋の談が古今東西に渉^{わた}つてかつて聞いた事もない作家の名を五つも六つも聞かされたには我を折つて、自分よりも二つも三つも年下に見えるコンナ若々しい青年がドウしてこんな博識かと煙^{けむ}に巻かれて降参してしまつた。どんな話をしたか、この時の談話はスツカリ忘れてしまつたが、古今東西に渉つた博覧に煙に巻かれてしまつた事だけを記憶しておる。

三 得意の絶頂

その頃徳富蘇峰^{とくとみそほう}、朝比奈碌堂^{あさひなろくどう}、森田思軒^{もりたしけん}の三人が新らしい文人の会合を思^{おも}立^{いた}つて文学会を組織した。蘇峰と碌堂とは新進第一の論客として勢望既に論壇を圧していた。思軒の名声はマダ両者に及ばなかつたが、造詣^{そうけい}文章は夙^{つと}に文壇の第一人者と推されていた。この三人が幹事となつて文壇各方面の第一流と目される名士を毎月案内して会合した。こ

の文学会には次第に有象無象を狩集めて結局文人特有の放肆乱脈に墮して二、三年後に自然的に解体したが、初めは最も選ばれたる少数者の集団であつて、当時の私設翰林院を以て目されていた。美妙は実に純文学を代表して耆宿依田百川と共に最始の少数集団に加つていたので、白面の書生が白髯の翁と並び推された当時の美妙の人気を知るべきである。

当時徳富蘇峰の『国民之友』は政治を中心としてあまねく各方面の名士を寄書家に網羅し、鬱然として思想壇に重きをなした雑誌界の霸王であつた。この『国民之友』が特別附録として小説を載せ初めたのは従来この種の評論雑誌が漢詩文あるいは国風の外は小説その他の純粹美文を決して載せなかつた習慣を破つた破天荒の新例であつた。随つて『国民之友』の附録は著るしく読書界の興味を惹き、尋常小説読者以外の知識階級者の注目をも集めて世評の焼点となつた。かつこれに加えて広告に巧みな民友社が商略上大袈裟に吹聴したから、自然この附録に載つたものは大家を公認される形があつて、読書界が毎年二季のこの附録を迎うるやあたかも回向院の番附を見ると同一の感があつた。その文壇に重きをなしたは今の『改造』や『中央公論』の附録のようなものでなくて、皮肉な正太夫はこれを称して民友社の大家製造といった。尤もこの大家製造は年々次第に粗製濫

造^うとなつて、終には民友社の折紙^{おりがみ}が余りに權威を持たなくなつてしまつたが、その初めはこの附録が文人の進士登第と認められていた。

この新例を創めたのは二十二年の春であつて、美妙の新作は春廼舍^{はるのやおほろ}臘の短篇と相並んで第一回の選に入つた。当時春廼舍は既に文壇の第一人者として仰がれていたので選に入るのは少しも不思議はないが、新進年少の美妙が春廼舍と並んで推されたのは異数であつた。シカモ、美妙は特にその作「蝴蝶^{こちよう}」のための挿画^{さしえ}を註文し、普通の画をだも評論雜誌に挿入^{そうにゆう}するは異例であるのを、扨^えりに扨つてその頃まだ看慣^{みな}れない女の裸体画を註文して容易に容れしめたのは、蘇峰に作家の意思を尊重する理解があつたからだが、また以て美妙の人氣が先例のない無理な註文をすらも容れしめたほど高かつたのを証する事が出来る。

が、この挿画の策略が見事^{あた}に中つて作その物よりは美しい女の裸体画が公衆の非常な好奇心を喚起した。この画は平家の若い美しい上臍^{じようろう}が壇^{だん}の浦^{うら}から遁^{のが}れて、岸へ上つたばかりの一糸をも掛けない裸体姿で源氏の若武者と向い合つてゐる處で、ツイこの頃も明治の裸体画の初めとして或る雑誌に写真が載せられた。今見れば何でもない拙^{ます}い画であるが、好奇心から評判になると同時に道学先生の物議を醸^{かも}し、一時論壇は裸体画論を盛ん

に戦わして甲論乙駁こうろんおつぱくしば暫らくは止まなかった。美妙自身もまた幼稚な裸体画論を主張して、議論が盛んになればなるほど「蝴蝶」の插画が益々ますます評判となつて、知るも知らざるも皆裸蝴蝶を喧伝した。この評判に蹴落けおとされて春廼舎の洗練された新作を口にするものは殆んどなく、『国民之友』附録に對する人気を美妙が一人で背負せおってしまった。が、実をいうとこの評判は美妙の作よりは省亭しょうていの拙い裸体画の成功であつたのだ。今なら当然発売禁止となるべきこういう下劣な裸体画を寛假した当時の内務省の役人の頭は今の官憲よりも美妙斎よりも進歩していた。S・S・S即ち鷗外おうがいの新声社派の「おも影」が『国民之友』に載つて読書界を騒がしたのはこの年の夏の第二回の特別附録の時であつて、美妙は文壇的には鷗外よりも早く、春廼舎に次いでのエポック・メーカーであつた。

一方、美妙斎が経営していた『以良都女』は、婦人雑誌としての思想上の位置こそいとも本善治とよしはるの『女学雑誌』に及ばなかったが、美妙の編輯だけに頗る文学的色彩に富み、搗かてて加えて美妙の人氣が手伝つてかなりに多数の読者を吸収していた。質も量も今の雑誌と比べては話にならぬが、丁度一と頃売れた『女子文壇』に若干の芸術趣味を加味したような相当な雑誌であつた。敵本の『女学雑誌』の素朴に引換えて極めて花やかな色彩を帯び、その寄書欄から多くの若い女の秀才を輩出した。後に美妙と結婚して蜜月の甘い陶

酔が覚めない中に果敢ない悲劇の犠牲となつた田沢稲舟もまたこの寄書欄から出身した女秀才であつた。

美妙は美男であつた。ドチラかというとなが永の人情本にありそうなニヤケ男であつた。言語が物柔らかで応対も巧みであつた。女の好きな国文の素養があつて、歌や韻文も上手なら芝居や音楽をも囁いて、初対面のものを煙に巻く博覧の才弁を持っていた。その上に天下の人氣を背負つて立つて、一世を空うする大文豪であるかのように歌いはやされていたから、当時の文学少女の愛慕の中心となつていた。『我楽多文庫』に載つた「情詩人」というは多分自分自身を主人公としたのであろうが、如何にも多恨多感な詩人らしい生活を描いたものだ。男の我々が見ると堪らなくキザで鼻持がならないもんだが、当時の若い女をゾクゾクさせた作で、キザな厭味な文句を文学少女は皆暗誦していたもんだ。

が、美妙齋の全盛は裸蝴蝶時代が絶頂で、それから以後は次第に下り坂となつた。『都之花』に載つた「花車」は人氣のお底で多少読まれたが、具眼者の間には愚作と認められていた。最も苦辛した労作と自からも称していた「いちご姫」は昔しの物語の焼直し染みて根ツから面白くなかつた。一時は好奇心を牽いた「おじやる」詞も徐々鼻に附いて飽

かれ出した。これに反して一方妙なイキサツから美妙と睨み合いになった紅葉はメキメキ
売出して硯友社の勢力が漸次に文壇を席卷し、何時とはなしに美妙に取って代つて人氣
を蚕食してしまった。文壇の寿命が如何に短かいにしても美妙の人氣は余りに飽氣なくて
線香花火のようであつた。だが、その短かい間の人氣は後の紅葉よりも檮牛よりも独
歩よりも漱石よりも、あるいは今の倉田よりも武者よりも花々しかった。美妙がもし裸
蝴蝶時代に早世したなら必ず一代の大天才なるかのように天下を挙げて痛惜哀悼を惜まな
かつたろう。生じい生延び過ぎて最も氣の毒な末路に終つた。

四 人氣失墜の原因

美妙齋はドウシテ人氣を失墜したろう。美妙齋について実は余り多くを知っていないか
ら、私の憶測が中るか中らないかは請合わないが、試みにその原因を数えようなら、

第一、美妙齋には限らないが、少年名を成すは第一の不幸で、美妙齋は余り早くから世
間に管待やされ過ぎた。詩人には随分早くから売出したのが古今珍らしくないが、美妙齋
は世間に出るなり直ぐ大家となつてしまった。二十か二十一で一躍して数年以上の操觚の

閱歴を持つ先輩を乗越して名声を博し、文章識見共に当代の雄を以て推される耆宿きしゆくと同格に扱われた。如何に天才でも非凡人でもこう易々やすやすとトントン拍子に成上ると勢い矜きよう驕きようとなり有頂うちようてん天となるは人間の免かるべからざる弱点である。美妙齋は余りに早く大家となったために自分をもまた余りに高く買い被り過ぎて少しも造詣ぞうけいに励まなかった。自然頭の中が忽ち空乏となつて、文章上の工風くふうも構想上の進歩も行詰ゆきづまつて飽かれてしまつた。

第二、美妙齋の人氣を博した第一の理由は文章上の新味であるが、この新味はこれまでの日本文には余りなかつた非情物即ち草木や動物の擬人法たと、例えば花が囁ささやいたとか犬が欠伸あくびしたとかいうような文句や、前にもいった足利時代の「おじやる」詞や「発矢はつし……何々」というような際立つた誇張的の新しい文調であつたので、初めの珍らしい中こそヤンヤと喝采かつさいされたが、段々馴なれると鼻に附いて飽かれてしまった。匂いの高いものは鼻に附くようになると嘔吐むかつくほどイヤになるもんで、美妙齋の文章の新味も余り香氣きぎが高過ぎたので一時は盛んに管待もてはやされたが、その反動として今度は極端に嫌きらわれるようになった。

第三、美妙齋に限らず、作家は余り評論をしない方が得策である。作家と評論家と

は自^{おの}ずから領分が違つてゐる。二者共に長ずる少数特殊の人を除いては、創作家は評論をするとボロが出る。どういふもんだか美妙齋は評論が好きで、やたらと幼稚な評論をしては頭の貧弱を惜^{おしげ}気なく露^{さら}け出してしまつた。殊に美妙齋の生^{なまぬ}緩い冗漫の言文一致は論難に不適當であつて、いとど薄弱なる議論を益々力弱くさせて世間の輕侮を招くようになった。(この点においてはかつて一度もマジメな議論をした事のない紅葉は有^{さす}繋に惻^{はなは}惻であつた。)

第四、美妙齋は余りに多才多能で、何でもちよつとは器用にやつてのけたので、一事の完成に全力を注がなかつた。創作もすれば評論もする、文学も論ずれば婦人も論ずる、小説の評判が悪くなると字引を作る、著述が受けなくなると算盤を持つ、甚^{はなは}だしいのはラムネの製造までもして損をしたというように、始終転々して一事を貫く熱心が欠けていた。文壇に乗出したそもその初めこそ小説を生涯の使命とする意^{いき}気^き込^こみがあつたらしいが、人氣が去つてからは他の仕事に転々して、最後に再び文壇に舞戻^もつた時は最^もう時代に遅れてしまつて、口を糊^{のり}するに忙^{いそ}がしくて捲^{けん}土^ど重^{じやう}来^{らい}の花を咲かせようとする意^い気^き地^ちが抜^ぬけていた。

第五、美妙齋は人となりが偏狭で、誰とでも親密になれなかつた。かつ誠実が多少乏し

かつたようである。その頃我々は大抵独身で、始終互いに往来して共に飲食する事が珍ら
 しくなかつたが、美妙と一緒に飯を喰つたという話を誰からも聞いた事がなかつた。勿
 論美妙の家で蕎麦そば一つ御馳走ごちそうになつたという人もなかつたようだ。かえつて美妙を尋ね
 る時は最中もなかの一と折も持つて行かないと御機嫌ごきげんが悪いというような影口かげぐちがあつた。かつ、
 文人の集まる席へ案内されても滅多に顔を出さなかつた。尾崎と一緒に下宿して一つ鍋の
 ものを突ツついた仲でありながら、文壇の羽振はぶりが宜よくなると忽ち裏切してしまつた。二
 葉亭ていとは親同士が同僚であつて、小学時代からの友人であつたが、中年以後は全く疎隔
 して音信不通であつた。文壇人とは誰とも面識があつたが、親友というものとは殆んど一人
 もなかつたようだ。であるから金港堂を離れて後の美妙斎は全く孤立して、誰とも交際つきあわ
 ないから随つて誰にも余り同情されないので、社会的にも私的交際にも段々存在を認められ
 なくなつてしまつた。

第六、稲舟女史との關係については真相を判断する材料を持つていないが、無責任な新
 聞紙に大袈裟に伝えられるほどの不徳が美妙にあつたとは思われない。美妙にも必ず同情
 すべき気の毒な事情があつたろうと思うが、平生へいぜい誰とも交際つきあわないから自然文壇の同情
 が薄く、同情したいにも同情するだけの材料を持つてゐる者がなかつたから、蔭かげにも日向ひなたに

も美妙のため弁疏する事が出来ないで、新聞紙の報道を半分虚伝と思いつつも暗々裡に認める外はなかった。実をいうと、日本のような道德的基準の低い国で美妙が犯したぐらゐの恋愛の過失で社会的に葬むられてしまうというのは不思議である。が、嶮峻の隘路に立つものは拳石にだも躓いて直ぐ千仞の底に墜ちる。人氣が落ちて下り坂となつた時だから、責むるに足りない聊かの過失でも取返しの付かない意外な致命傷となつたのである。愛の冷却した夫婦の結合は不自然であるとか虚偽であるとかいう勝手な理窟を附けて不条理極まる破縁を不人情とも没義道とも思わず、あるいは三角や四角の恋愛を臆面もなく手柄顔に告白するのを少しも怪まない今から考えると、ただこれだけで葬むられてしまつたのは誠に氣の毒であつた。

以上は美妙が文壇に失墜した所以の重なる理由である。それ以外に幾多の遠因も近因もあろうが、畢竟するに最後が極めて悲惨であつたのは自ら求めて世間や友人の同情を薄くしたためである。文壇が美妙に背いたのではなくて美妙が文壇に背いたのである。

だが、ドウしてこんな風に偏小狹隘求めて世間に遠ざかるようになったかという、美妙をこんな偏屈に孤立を好むようにならしめた所以の美妙の生立ちの家庭の事情に遡らねばならないが、美妙と交際の極めて浅かつた私はこれを究むるだけの材料に不足してお

る。が、美妙の生立ちには一貫した一条の悲劇的徑路があつたように聞いている。

五 美妙と紅葉との比較

美妙と紅葉とは種々の点で違つていた。第一に雅号である。美妙斎美妙と名乗つた理由は知らぬが、別段説明を聞かないでも解るほど露骨であつて詩人の奥床しさを欠いておる。小説家よりは曲芸師染みて寄席のビラに書かれそうだ。紅葉山人というは青年時代に芝に住つていた因みから紅葉山の人という意味で命じたので、格別捻くらない処に洒落の風が現われている。第二に筆跡である。美妙斎の筆蹟は定家^{ていか}のような極めて美しい書風であつたが、何となく芸人披露の名弘めの散らしの板下^{はんしたげん}然として気品に欠けていた。紅葉は^{しよくさんじん}蜀山人を学んで、若い頃のは蜀山人以上に銜氣^{げんき}満々としていたが、晩年はスツカリ枯れ切つて蒼勁^{そうけい}となつた。蜀山人から出て蜀山人よりも力があつて、何処^{どこ}となく豪快の風が現われていた。

風采からいっても、美妙は色白^{いろしろ}な柔々^{よわよわ}しい、ドチラかというとし柔氣^{にやけ}で、如何にも「詩人でございます」といったような美男であつたが、紅葉は色の浅黒い、苦^{にが}み走つた、

スツキリと背の高い江戸前の、美男というよりは好男子という方であつた。美妙は鰯^{いな}の背のように光つたベラベラ着物に角^{かく}帯^{おび}をキチンと締め、イツでも頭^{あたま}髪を奇麗に分けて安^{やす}香水^{うすい}の匂いをさしていたが、紅葉は燻^{くす}んだ光らない着物に絞りの兵児^{へこおび}帯をグルグル巻いて、五分刈頭の紺足袋で八幡^{やわたぐろ}黒の鼻緒の下駄が好きであつた。万事がこんな風に著るしく違つていた。

私が先ず二人の性格の相違を著るしく感じたのは初対面の印象であつた。美妙斎との初対面は前にもいった通りに何を訊^きいても知らざる事なく、打てば響くように直ぐ答える博覧^{はく}に驚かされたが、二度三度と重なるとイツデモ一つ話ばかりをしていて博覧^{はく}の奥底が忽ち看^みえ透いて来たには嫌^{いや}氣^ぎが挿して来た。

紅葉を尋ねたのは美妙に会つてから三、四カ月後であつた。その頃紅葉は飯^い田^い町^{まち}の国学院大学の横町にお祖父^{じい}さんと一緒に住んでいた。美妙の武者^{むしや}窓^{まど}の長屋よりは氣^きの利いた一軒^{だて}建であつたが、美妙が既に一人前の紳士であつたと違つて、紅葉はマダ書生ツぽで三畳の書齋に納まつていた。何しろ三畳敷だから二、三人座るとギツシリ詰つて身動きも出来ない位で、美妙の書齋のように嚇^{おど}かし道具^{なぐさ}を列べる余地もなかったし、美妙のように何でも来いと頤^{あご}を撫^なでる物識^{ものしり}ぶりを發揮しなかった。例えば美妙は、これなら豈^{よも}夫知つ

てしまいと窃に^{ひそか}予期して質問した西鶴^{さいかく}についてすらも初対面の私を煙に巻くだけの批評をしたが、紅葉はこの頃漸と『一代男』を読んだばかりで何が何やらサツパリ解らない、女の行^{ぎようずい}水^{みづ}している処を隣りの屋根から遠目鏡^{とつめがね}で覗^{のぞ}いている画なんぞあつて面白そうだが少しも解らない、『源氏』よりは難かしいもんだと率直に答えた。美妙はドイツケンズもサツカレーも鵜呑^{うのみ}にした批評をしたが、紅葉はやはり難かしくて少しも解らないといった。字引をコツコツ引いて油汗をダクダク出して考え考え読んで、なるほどコイツは巧^{うめ}エやでは少^{ちつ}とも面白くないと言った。美妙は学者然と取澄ましていたが紅葉は極めてザツクバランで少しも飾らなかつた。美妙の知識の領分はかなり広いようだったが、イツデモ一つ領分の中を彷徨^{ほうこう}して同じ話ばかりしていた。紅葉はこれに反して段々と新らしい領分を開拓して、会う度毎^{たんび}に必ず新らしい本を読んで新らしい話をした。

美妙斎は少しも温か味がなかつた。何^{なん}度^{たび}会つても他人行儀^{しんそこ}で、心底^{きんぞう}から胸襟^{きようきん}を開いて語るといふ事がなかつた。強^{あなが}ち^{がみ}袴^{しも}を付けた四角四面の切口^{きりこう}上^{じよう}で応接するといふわけではなかつたが、態度が何となく余所々々^{よそよそ}しくて、自分では打解^{うち}けてるツモリだったかも知れぬが、他^{ひと}には何時^{いつ}でも城府^{じやうふ}を設けてるように見えた。紅葉はこれに反して、腹の中には鉄条網を張つて余人の闖入^{ちんにゆう}を決して許さなかつたが、表面^{うわば}は城門を開放して

靴でも草鞋でも出^{しゅつ}入^{にゅう}通り抜け勝手たるべしというような顔をしていた。それゆえ美妙齋とは何年交際^{つきあ}つても親友となる事が難かしかつたが、紅葉は初対面の時から百年の友のように打解^{じょう}け、戯^{しやう}言^{ごん}もいえば気焰^{きえん}も吐いて誰とでも直ぐ肝胆を照らして語り合つた。

その実、紅葉は初対面から誰でも親友扱いするが心から打解けるのではなかつた。江戸ッ子風の洒^{しや}脱^{だつ}らしく見えて実は根ツから洒脱でなかつた。硯友社という小さな王国に立^た籠^{はこ}つて容易に人を寄せ付けなかつた。実をいつたら美妙の方がリベラルで、紅葉の方が遙かにオーソドキシカルであつたかも知れぬが、リベラルな美妙が人に嫌われてオーソドキシカルな紅葉がかえつて人に親^{した}まれたというは紅葉の社交の才^{すう}が勝^{すぐ}れていたからで、文壇的には狭量偏固な鎖港攘夷党であつても、社交上には如才なく振舞つて勢力を扶植し、硯友社以外にも多数の後援を擁していた。美妙はこれに反して自分から世間を狭くして友人にも遠ざかつたから、文壇的にも社会的にも孤独無援の位置に落ちて、終^{つい}に悲惨の生涯の幕を閉じた。

六 悲惨な最後

美妙の文壇生活の最高調は『都之花』時代であったが、社会生活としての最得意は平永町に新築した頃であつたろう。駿河台の暗ぼつたい旗本屋敷の長屋から移転したので、タシカ今の神田キネマの辺であつた。軒並の町家の中で目立つた相当に大きな門構えの二階建で、間数もかなり多かつたらしい。木口は余り上等とも思わなかつたが、左に右く木の香のする明るい新築だつた。今と違つてマダ操觚者の報酬の薄かつたその頃に三十になるかならぬかの文筆労働者でこれだけの家を建築したのは左も右くも成功者であつた。

書斎は二階であつたが、椅子テーブル式で、クローム画の額や、ブロンズや、西洋家具の古道具屋から仕入れたものをゴテゴテ列べ、何のツモリか知らぬが弾けもせぬヴァイオリンが壁へ掛けてあつた。今なら文化生活で、美妙の得意はこの安価洋風裝飾に現れていた。が、その頃は字書を編纂していたので文壇人としては既に一步を降り坂に踏入れていたのだ。

美妙を訪問したのは前後三、四回しかなかつたが、この平永町の新居を偶然通り縋りに尋ねたのが最後であつた。僅か二十分ほど話して美術学校の一年生ぐらいが作つたらしい木彫の牛を見せられたが、それぎり美妙とは会わなかつた。自分ばかりじゃない、そ

の頃から以後は美妙が時折寄稿した雑誌の編輯者以外には美妙と往来したものは殆んどなかったろう。

それでも稲舟と結婚した時は兩人連名で益々御愛顧を願うというような開業の引札然たる活版摺の通知を交友間に配った。が、新婚のお祝いをする遠がない中に最う二人の恋の破綻が新聞で剔抉された。それから以来はラムネを作つて損をしたとか、公園芸妓を引入れたとかいうような面白くない風説を新聞の三面で聞くばかりで、文壇人としての消息はまるきり絶えてしまった。それから二、三年経つてから復たポツポツと美妙の名が低級な雑誌に見え出して、そういう雑誌の発行者や編輯者の口から噂を聞く事があつたが、お情に原稿を買つてやるというような口吻で美妙の気の毒な境遇が想像された。書いたものもまた色も香も艶も生気もない萎れた花の憐れさを思わせるようなものばかりだつた。

二葉亭が没した時、諸家の追懷談を集めた追悼録を作ろうとして少年時代の友たる美妙齋へも寄稿を依頼した。その時の美妙の返事は敗残者の卑下した文体で、勝誇つた寵児のプライドに充ちた昔の面影は微塵も見られないで惻隠に堪えられなかつた。

それから一、二年経つてからであろう、美妙の訃の伝わつたのは。最後の隠れ家は駒込の伝中辺だと聞いたが、丁度旅行していたし、十何年間もまるで音信不通であつたし、

それ以前とても親友というほどの関係でなかったから葬儀に行かなかったが、後に聞くと送棺者がただ僅かに三、四人だったそう。自ら世を狭くしたのだとはいえ、誠に気の毒な最後であつた。

それから数月経つて聞いた咄^{はなし}だが、最後は石橋^{いしばし}思案^{しあん}と丸岡^{まるおか}九華^{きゅうか}が専ら^{もっぱら}世話をしたそう。いよいよ重体となつてから、九華はシユークリームが美妙の好物であると聞いて見舞に一と折持つて行つた。美妙は大変喜んだので、家人も厚く感謝して大切にし、病人の外は子供にさえも手をつけさせなかったそう、^か黴^びの生えたシユークリームが臨終の枕^{まくら}頭^{もと}に残つていたそう。日本の言文一致の先驅者（あるいは創始者）として文壇の風雲を捲^{まき}起^{おこ}した一代の才人の終焉^{しゅうえん}として何たる悲惨の逸事であろう。こういう悲惨な運命を速^{まね}いたのは畢竟美妙自身の罪であつたが、身から出た錆^{さび}であつたにしても、日本の新文体の創始者に対して天才の一失を寛容しなかつた社会は実に残忍である。

（大正十三年九月補修再録）

青空文庫情報

底本：「新編 思い出す人々」岩波文庫、岩波書店

1994（平成6）年2月16日第1刷発行

2008（平成20）年7月10日第3刷発行

底本の親本：「思ひ出す人々」春秋社

1925（大正14）年6月初版発行

初出：「きのふけふ」博文館

1916（大正5）年3月

※初出時の表題は「山田美妙」です。

入力：川山隆

校正：門田裕志

2014年7月16日作成

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られ

ました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

美妙斎美妙

内田魯庵

2020年 7月18日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>